

〈本論第三回：キーワードと年表〉

1. 年表

- 1596 ルネ・デカルト誕生（～1650）
- 1606～1614 イエズス会士の学校で神学、数学、自然学を学ぶ
- 1618～1648 三十年戦争
- 1619 デカルトの夢 すべての学問の革新について夢想し、夢を見る
- 1623～1625 哲学者サークルとの交流、教皇使節宅で哲学大系の構想を発表し、同席した枢機卿から完成を強く勧められる
- 1628 オランダに移住
- 1637 『方法叙説』
- 1641 『省察』
- 1649 『情念論』
- 1649 スエーデン女王クリスティーナの招聘によりストックホルムへ、翌年肺炎に罹り死去

1. ルネサンスからデカルトへ：連続

- 個我のATOM化（近世、近代の基本状況）
- 〈世界と人間の発見〉
- 世界論（地誌、地理学、航海論、天文学 etc.）、人間論（人間学、哲学、倫理学）（→ 解剖学へ → 『解体新書』の前提）
- 自我定点からの世界の把握  
= 遠近法（マザッチョ、フランチェスカ、ウチェッロ、レオナルド、デュラー等々） → デカルト座標

2. ルネサンスからデカルトへ：断絶

- 生氣論（自然神学） ⇔ 機械論
- 魔術、錬金術、占星術はルネサンスにおいてはほとんど公認の学問だった
- デカルト的合理主義による大絶滅
- 近代科学の出発
- ATOM的動揺（共同体的安定性の欠如）
- ルネサンス的平衡（Discordia Concors：対立物の調和）  
⇔ デカルト的懐疑 → 〈欺く神〉の心象世界へ → 〈実存の不安〉

### 3. 〈われ思う、ゆえにわれあり〉：近代合理主義の中心テーゼ

- **je pense, donc je suis.** (『方法叙説』)
- **cogito ergo sum.** (第三者訳)
- **ego cogito, ergo ego sum, sive existo.** (デカルト校閲の『方法叙説』訳)
- **ego cogito, ergo sum.** (『哲学原理』)
- **ego cogito, ego sum.** (『省察』)
- どうして **je connais (I know)** ではないのか
- どうして **puto (思う)** ではないのか (→ **purus** : 純粹自我との親近性)
- **connaitre** → 認識論への自然な展開 (自我の明証性を含め)
- **penser** に含まれる実存了解の地平 (→ パスカルと共有)
- 懐疑もおそらく認識ではなく、思惟の次元で生起
- 〈欺く神〉の神学へ
- 翻訳における思惟と認識、存在と実存のねじれは本質的かもしれない

### 4. Cogito ergo sum の近現代的展開

- ① 認識論へ
  - a. 『純粹理性批判』 → 新カント派認識論
  - b. 心理主義 → 現象学 (ブレンターノ、フッサール)
- ② 実存主義、存在論へ
  - a. ニーチェ、キルケゴールの実存情念論
  - b. ハイデガー、サルトルの〈現象学的存在論〉
- 基軸にはつねにデカルト的合理主義の継承と変容、対峙がある
- それは近現代の制度構築がつねにデカルト的合理主義の継承、変容、対峙であったことと照応している
- われわれの近現代は、いまだに **cogito ergo sum** の妥当性の問いかけの視界そのもののなかにある

### 5. 機械情報革命の準備期 = マニュファクチュアと商業資本の進展

- 個我の原子化開始 → 〈世界と人間の発見〉へ (ルネサンス)
- 東西の平行を確認することが可能
- 琳派のアニミズム復興
- 〈天下布武〉、〈楽市楽座〉に見られる集権、重商志向
- しかし幕藩体制により社会進化が停止、化石化した
- その結果、日本のデカルトは生まれなかった

### 6. デカルトの革新性

- 個我の全面的対自化

- 対自するものとしての「われ」
- レス・コギターンス（考える物体）
- コギト・エルゴ・スム（われ思う、ゆえにわれあり）
- 思惟と存在（自己存在）の直接的連結は近代的定位の本質
- しかし内在的矛盾 → まさに思惟と存在の連結の根拠が不在
- 〈現象学的存在論〉によるデカルト的存在論の再検証  
(ハイデガー、サルトル)

## 7. 『方法叙説』（1637年）

- デカルトの処女作、哲学的自伝 = 自伝的哲学
- これも近代的定位の特性の一つ
- 原題はバロック的な過剰を示す  
『みずからの理性を正しく導き、諸学において真理を探究するための方法について  
の叙説、およびこの方法の試論（屈折光学、気象学、幾何学）』
- 文体は講話であるから、〈序説〉ではなく、〈叙説〉が正しい。その序論部分だけが通用している。
- 個我が世界を発見し、その原理を思考する → 近代的定位の基本型

## 8. デカルトの夢 → 『方法叙説』の原体験

- 最初のデカルト伝（アドリアン・バイエ）の報告
- 1619年11月10日
- 〈すべての学問の革新〉を夢想
- 解析幾何の最初のアイデア
- 〈方法〉はいまだに不在 → 〈懷疑〉の祖型
- 三つの夢 → 善悪、神の加護の中での逡巡 → 〈辞書〉の信頼感で幕

## 9. 〈解析幾何〉と〈デカルト座標〉の本質連関

- 古典的幾何学 = ユークリッド（エウクレイデス）幾何学『原論』
- ルネサンス人文主義の範囲での翻訳、流布
- 平面幾何学としては完成形態 → リーマン幾何学によってようやく革新
- 古代の天文観測、土地測量の知見の蓄積が背景
- しかし『原論』は純理の学で応用は捨象 → 純理〈エレガンス〉の伝統へ
- デカルトの解析幾何は、幾何学としては何も新しい要素を付加しない
- その意義は定量化による、応用の可能性
- 測れるものはすべて測れ（ガリレオの格率） → 近代科学の基礎
- 応用的操作に対応する〈物〉 = 〈延長物〉（レス・エクステンサ）
- 座標系の中では、物象は純粋な延長体として固定される  
(コンピュータグラフィックの基本でもある)

## 10. ルネサンス的幾何学

- 『原論』の流布は建築学方面での応用を生んだ
- しかしそれらはすべて〈図形〉としての応用である（定規、コンパス、図形）
- 建築工学は未熟で耐性は経験によるしかなかった
- 完成後に崩壊した建物も多かった
- 数魔術に照応する図形の魔術を生む（錬金術、メフィストのペンタグラム）

## 11. デカルト的解析幾何

- 定量化 → 関数化 → 時間の撥無（＝関数の逆転を可能にする）
- $E=mc^2$  もこの文脈上にある
- 時間性の消滅により、シミュレーションが可能となる
- シミュレーションはコンピュータ時代に始まったのではなく、定量化と関数の発見はそれをすでに内包していた
- 定量化の前提は、〈物の一元性〉の導入 = 〈延長〉としての世界
- デカルトの革新は純理の革新ではない
- 応用と現実操作のシステム化、そのための〈方法〉の発見がその本質
- 機械情報革命が必須とするメガ・マシン構築の方法を、デカルトが提供した
- ルネサンス的生气論（魔術的自然観） → 機械論への大転換
- 動物機械論のエクセントリシティへ
- 〈解析の万能〉 → 初期デカルト主義の基調 → 工学、軍事学への応用

## 12. デカルト的合理主義の時代的背景

- 近世的集権化の進行 → 制度中核部に近代官僚制が展開し始める
- 制度設計、運営の合理性、合理主義が時代のコンセンサスとして広がる
- 設計者、運営者はアトム化された合理主義者であり、すでに〈コギト・エルゴ・スム〉の本能的実践者だった
- 欠如していたのは明確な〈方法〉と〈システム〉
- デカルト登場の意味

## 13. デカルト的明証性 → 近現代の思惟の内実を決定

- 明証性とは、明証的に存在する〈われ〉の認識の明証性である
- 〈純粹自我〉の理念
- ホッブズ、スピノザ、カントを経て、フッサール、ハイデガー、サルトルに至る哲学的思弁の系譜
- 哲学の〈記述〉における基軸を形成
  - = 明証的記述の主体は純粹自我である
- フッサールのデカルト参照等
- しかしこの哲学史の常識は、あまりに純理的であり、応用的方法としてのデカルト主義、その近代的〈操作〉のインパクトを隠蔽してしまった

→ もう一度原点に戻ってその定位内実を検討する必要がある

#### 1 4. 〈方法〉の四公準

##### ①主観的明証性

→ 純粹自我である〈わたし〉の視界に立ち現れる〈もの〉はすべて明証的である

##### ②分析（解体）

→ 問題を、できうるかぎり多くの、解決可能な小部分に分割すること  
→ 〈問題解決〉の方法であることに注意（ここにも実践性が内在）

##### ③総合（組み立て、操作）

→ 思考を単純なものから複雑なものへと順次進めること  
→ 順序が実際には存在しない場合でも、それを想定して外挿すること  
→ 組み立ての順序であって、観照の全体性ではない  
→ カント的文脈（純粹理性の認識）での〈総合〉ではない

##### ④全体性の検証

→ 結論を出す前に（応用にかかる前に）部分の完全性、ついで全体の完全性を検証すること

#### 1 5. 主観的明証性は近代的判断形式である

→ 主観的明証性による判断は、近代においてはじめて登場した  
→ この個我に対応する〈われわれ〉も純粹化される  
→ ここに〈国民〉の母胎も生まれつつある  
→ 法理としての純粹性、合理性  
→ 近世的〈講話〉（心学、儒学、国学、蘭学）における話者と聴き手  
→ 平準化の進行、その意味での純粹化の共有（心学、蘭学に著しい）  
→ 近代的生産様式によって規定されている  
→ 機械に貼りついたアトムの定位心象

#### 1 6. 分析的方法は、まず軍事面で実用化された

→ 敵の隊列を〈解体〉する方法  
→ アレクサンドロスの長槍兵と騎兵の組み合わせ  
→ 中央突破、各個撃破（ナポレオン）に通じる  
→ しかしアレクサンドロスの戦法は直感的、かつ経験的であった  
→ ナポレオンの戦法は〈方法〉として確立されている  
→ 近代的合理主義の応用  
→ デカルトの合理主義のルーツの一つは、オランダの近代軍制である

- オラニエ公マウリッツ（1567～1625）の軍隊に参加
- 近代軍制の祖 = 分析による軍列の規格化、号令の一律化等
- 幕末に移植された〈西洋軍制〉のルーツでもある

#### 17. デカルト的明証性の確立

- 近世的ドグマの大絶滅
- ヘルメティズム、錬金術、自然魔術の〈非・公式〉化 → 地下水脈化
- ルネサンス的人文主義の否定
- 錬金術は当時公認の〈学問〉であった（エリザベス女王の顧問錬金術師、占星術師、ジョン・ディー等 → ファウスト第二部もこの枠を活用している）
- 機械論の確立 → アニミズム的世界観（自然神学、自然魔術）のタブー化
- しかし動物機械論は逆側の極端となる = 〈生き物の常識〉の否定

#### 18. 第三公準は〈総合〉ではなく、〈組み立ての順序〉＝操作手順である

- 純理ではなく応用に眼目
- すでに解析幾何に見られた特質
- 〈もの〉（延長体）としての世界操作がその本質
- 〈工作人〉（ホモ・ファベル）の近代的登場

#### 19. デカルト的〈方法〉のモデルは、機械の合理的解体、組み立て、点検である

- デカルト的合理主義は時代精神の要請であった
- その時代は、マニュファクチュア時代、商業資本と海外貿易の懐胎期であり、すべての制度は合理的再編へと向かっていた
- その真の基底部は人類史の第二革命としての機械情報革命である
- その前半部を担うべき合理的手順の確立
- 『方法叙説』のバロック的表題にも、その応用の意図は如実に反映している
- 徹底性、全体性は物としての世界の一元的支配、合理的操作を可能にする

#### 20. マニュファクチュア的生産を支える社会的分業における合理性

- アダム・スミスのピン生産モデル（『国富論』）
- 立論の根拠は製品の質ではなく、量
- 定量化が生産様式の基軸となりつつある
- 江戸期においても、分業の細分化による製品の精巧化は定量的に進行した
- 初期浮世絵は分業の細分化により、錦絵に進化する等

#### 21. 社会的分業の先行性 → 機械生産の分業は後発的

- ではなぜ近世において、この社会的分業が（おそらくあらゆる地域で）定向的に進化していったのか
- レオナルドの発明はすでにニュファクチュア的である

- 解体と組み立ての間に合理的結合の萌芽が見える
- 個我の解放による、想像力の飛翔が機械革命の動因となる
- しかし江戸的製作の定型としての〈からくり〉は、マニファクチュアへの滞留の限界を明確に示している
- 〈普遍的方法〉の合理性の欠如
- ここに機械生産の先駆的イデオログとしてのデカルトが登場する必然性があった

## 2 2. 近世的生産と定位における〈方法〉の有無

- 東西の差異の真の原因はなにか？
  - 日本的近世は近代的合理性へと自己進化できなかった
  - ⇔ デカルト的〈方法〉は、近代的生産への道を啓いた
- 個我のアトム化の深度が異なる
- 自己から見ての世界の再組織（工作人的際組織）の徹底性に反映
- 人為的身分制（士農工商）によるアトム化の停止、阻害
- 明証性、徹底性、方法性の阻害

## 2 3. デカルト的合理主義に内在する神学的是認の契機

- 〈方法〉は、機械に〈理性〉を与える
- コギトの写像としてのシステム、機械 → AI論の先駆
- 理性は世界の全体を資源化する権利を有するとされる
- 究極の根拠は神学
- 完全なる神が、理性を人間に与え、世界支配を許した **etc.**
- アダム神話の再登場
- デカルトには神学が（まだ）必要だった
- 〈文明道具系〉の逆説
- 十九世紀的〈文明化イデオロギー〉への影響
- 〈文明化イデオロギー〉もキリスト教化と融合することが多く、無神論的である場合においても、キリスト教的神学を自己是認の形式として用いることが常態化していた

## 2 4. デカルトにおける〈完全なる神〉の理念

- デカルトにとっての中世の近さ
- ルネサンス人にとってのそれとは別の位相（宗教的反動＝反宗教改革の強権的現実）
- 完全な存在者としての神 = 幾何学的明証性の根源として
- 人間的理性の限界を超越しつつ、それを根拠付ける = 理論的要請
- 神とコギトをつなぐ媒介が欠落 = 明証性による直接的連結  
= 媒介としての〈信仰〉、〈恩寵〉の欠如

- ルネサンス的秘教には信仰は内在していた → 純粹化した〈脱自〉として
- ⇔ コギトにおける対自性の寡占が、この〈脱自〉を捨象しつつ抑圧した
- ルネサンス的均衡（〈対立物の調和〉）の不在、否定
- 世界と自己との直接的連結においても、媒介は不在である
- 近代固有の悪夢の懐胎 → 〈欺く神〉の登場

## 25. 〈欺く神〉の否定神学（『省察』）

- 〈方法的懷疑〉の最大値としての思考実験
- 感覺的現実の否定（懷疑の可能性を除去できない、が根拠）
- 数学的明証性は〈コギト〉において自己証明される
- しかしなお誤謬の可能性は残っている
- どうして神が造ったわたしは明証性においても誤謬を犯すのか
- どうして神が造った感覺世界は誤謬に満ち満ちているのか
- 思考実験としての〈欺く神〉
- 欺かれたくないわたしは、徹底的な懷疑を防壁として、すべての感覺界を遮断する
- そこにおいても、真偽判断における誤謬は存在する
- コギトとしてのわたしは、有限であり、不完全である
- しかしその判断が可能であるのは、あらかじめ無限性、完全性の理念がわたしの裡に存在するからである
- この無限、完全こそ、わたしの裡なる神の実体に他ならない
- この神を是認することによって、〈欺く神〉は消え、わたしはコギトと世界を取り戻す
- 神は無限の完全なる実体であることが証明された

## 26. 対自の闇としての〈神の存在証明〉

- 無限と完全性を神の存在証明に用いるのは中世神学の常套であった
- しかしそれは〈欺く神〉の悪夢を生むことはなかった
- 〈欺く者〉は墮天使であり、悪魔であることが中世的常識であった
- その場合、感覺世界の欺瞞は、悪魔＝欺く者の手段となる
- したがって、デカルトの〈欺く神〉を誰が見せているのかという根本の問題が生じる
- それが真の神であるとしたら、神の本来の救済計画（人間を原罪から救おうとする救済史の計画）に根本から反するのではないか
- しかし対自における神の存在の根拠はそこにしかない（ことが明証的に自己証明されている）
- 対自の堂々巡りが始まる
- スタヴローギン、イヴァン・カラマゾフの世界 = 近代的実存の闇



## 27. デカルトの神の根拠 = 神学的最終解決

- 無限の観念を神と実体的に結合した
- 〈否定の神学〉(クザーヌス他)とシンタクスの構造が重合
- しかし再び不完全な人間と完全なる神を媒介する〈信仰〉が欠如
- 両者は〈無限〉によって直結される
- 裡なる理性神の誕生 → 理神論の展開
- 〈無限〉の超越的アウラが消滅すれば、それは機械論的無神論となる
- デカルトにはこの二面性が共存、共在していたように思える
- この二重性も、中世神学において先取りされていた(エックハルトの〈ウニオ〉=神人合一の理念)
- しかしエックハルトにおいても、無としての神は、信仰によってわたしと媒介されている → 〈無の神学〉の可能性

## 28. 近代的コギトと〈神〉の二重性

- コギトによる世界支配の心象が、先駆的世界支配者としての〈神〉を悪夢化
- 定量化による世界支配は、たしかに悪夢の集積を生み続けた  
= 〈文明の邪気〉の事実的存在
- したがって、合理主義に内在する悪夢が、神を悪夢としたとも言える

## 29. デカルト的合理主義における中世的悪夢の潜在、内在

- 維新的合理主義における〈錦旗〉の中世的、古代的復古に比較可能?
- 廃仏毀釈と国体論は、近代国家の擬似神として〈欺く神〉に近づいたと言えるかもしれない

## 30. 江戸はデカルトを生まなかった、しかし合理主義は生んだ

- 合理精神の覚醒は内在的であった
- 下部構造の定向的進展、擬似集権の解体に伴う、真の集権制への胎動がその根拠である
- 蘭学がその過程を早めた

(第三回キーワード終わり)